
君の体温

福岡在住者

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の体温

【Nコード】

N42120

【作者名】

福岡在住者

【あらすじ】

僕と君、一瞬の物語その1。

（前書き）

僕は全てを忘れてしまっていた。

つまり僕の記憶から君という存在も消えていた。

僕は全て忘れてしまったのです。

何がかつて？

君の声、君の匂い、君の足音、君のクセ

君の髪形、君の瞳、君の耳、君の背丈、君の手

君のよく着る服、

君の笑顔、君の話、君を思う気持ち

君との繋がったであろう時間を．．．。

そう言う君は話してくれましたね？

僕が忘れてしまった：その時間の事を。

それでもやっぱり僕にはピンときませんでした。

でも、忘れたというだけで

過去に二人はそうしていたのかもしれないね。

だったらこれから先にまたそれだけの

いえ、それ以上の思い出を作ればいいのです…

もう一度一緒に歩きましょう。

なんて本当に言えると思いますか？

僕はもう今の時点で君に耐え難い苦しみを

与えてしまっているのではないのでしょうか？

君はそれを否定するかもしれない、

いや今のこの僕に対してここまでしてくれているのだから

君がそれ以外の選択をするとは思えません。

嗚呼、それにね

僕は君のよく知る僕じゃなくなるかもしれないんです。

記憶を喪失してしまうとその後は

ガラリと性格が一変してしまうこともあるそうです。

いえ、もうすでに何か変わってきてるのかもしれないね。

君も僕がよく知る君に戻れないと思います。

きっと必要以上に気を遣わせる事になるはずですから。

こんな大きな出来事の後では

二人の関係は変わってしまうのは仕方ないことです。

それでも

今の僕でもよく分かるのは

君がすごくいい子だということです。

そんな君には幸せになってもらいたいと

記憶のあった頃でも、無い今の僕も変わらず感じていたでしょう。

でも、きっとその方法や過程は大きく違うのです。

だって同じようにできるはずないから…

君には

その時、彼女は言葉を無理やり遮るように抱きついてきました。

それは、不思議なものでした。

いつまでも、いつまでも、覚えていたいもの。

いえ、本当は初めから覚えていたのかもしれませんが。

人間のもつとも奥深くに根付く記憶の欠片。

変わらずにずっとそばにあった

君の体温。

（後書き）

短編のお話となります。

描写が少ないのはその状況を読んでもくださった
皆様が想像して遊ぶことができたらなあー…

と、言い訳しつつ閉めさせていただきます。

ありがとうございます） * * y o。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4212o/>

君の体温

2010年10月21日01時59分発行